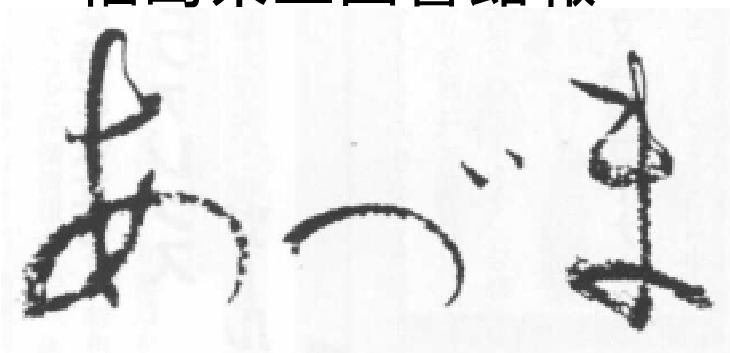
福島県立図書館報



第57巻（通巻261号）

「国際ゾンタ福島ゾンタクラブと児童図書」

福島ゾンタクラブ十周年記念実行委員長　國分順子

国際ゾンタ福島ゾンタクラブは去る４月２３日、市内ビューホテルにて創立１０周年記念式典を行いました。県知事佐藤栄佐久様、市長瀬戸孝則様、県立図書舘長佐藤長久様、市立図書舘長古関健一様、その他大勢のご来賓、日本各地からゾンシャンの方々をお迎えして、１０年の歩みを振り返ってみました。

設立当時、奉仕活動の方針として三つの目標を掲げました。環境問題・高齢者問題・そして子供の教育問題です。子供は人類社会の将来を担う国の宝であり、それ故に子供の教育は大事業でもあるわけです。私達ゾンタクラブはその一端を担うために何ができるか話し合った結果児童図書を贈ることに決めました。クラブ設立の翌々年 1998 年から現在までの九年間県立図書館に、遅れて、市立図書館に毎年児童図書を贈呈しております。

ところで、誰もが経験していることだと思うのですが、幼少期に父母や祖父母あるいは兄姉から、寝物語を聞かせてもらったり、本を読んでもらったことは、生涯忘れられない記憶であり、思い出す毎に心温かく、懐しさを蘇らせてくれます。又、蔵の中にぎっしり積まれた本を手当り次第読みあさったり、家の本棚に並べられた何やら難しそうな本であっても自ずと読んでみたくなり、読み始めると止められなくなってくる、そうした読書経験はその後の人生に大きな喜びを与えてくれます。

私は高校で国語教師を長い間勤めましたが、常に読書の奨励と言語生活の大切さを心がけ、生徒達に訴え続けてきました。そして自らは「文学」とは人間学であり、学び教えることにこの上ない幸せを感じてきました。書物は遙か昔から生きてきた人類の歴史であり、魂と知恵の証しです。自分というちっぽけな存在ではどんなに長生きしようにも、ほんのわずかな経験のみで人生を終えねばなりません。しかし、書物を読むことによってどれほど広く深い経験を、それもくり返しくり返しできることでしょうか。自然界の神秘や残酷さ、人間の矛盾に満ちた愚かさや、時に見せる優しさ等々、読書によって知識も心も豊かになり、自分の存在意義を問い、社会に役立つ生き方さえ見つけ出せるかもしれませんし、世知辛い人の世を生き抜くためには、自分なりの人生哲学を身に付けることの必要を感じる時、読書こそその手立てであることに気付きます。

子育ては胎教から既に始まっており、幼少期こそ最も大切な時です。子供と共にいい音楽を聴き、美しい美術を鑑賞し良い本を読み聞かせてやれば、子供は母の声を聞きながら、雪どけのせせらぎ、そよ吹く風の優しさ、小雨の葉をぬらす音や鳥のさえずり、木枯らしに咽び泣く木々の痛々しさ等々、夢想を膨らませて聞き入ることでしょう。

世の母親たちよ、愛するわが子に、美しい言葉で語りかけ、自らの優しい声でいい本を読み聞かせてほしい。国際ゾンタ福島ゾンタクラブが、児童図書にこだわるゆえんが、ご理解頂けるかと思います。

この度私どもが１０周年を記念して寄贈した書架は、図書館の職員の皆さんがアイディアを凝らして設計なさったとのこと、ぜひ見に行きたいと思っております。

國分　順子　（こくぶん　よりこ）

1940 年喜多方市に生まれる。相模女子大学学芸学部教育課程を卒業と同時に、学校法人桜の聖母学院高等学校に勤務。2005 年 3 月、42 年間勤務した桜の聖母学院高等学校を退職し、現在は夫の経営する建築設計事務所「水明社」役員。

1996 年 4 月、女性の事業経営者や専門職の人々の世界的奉仕団体である国際ゾンタ福島ゾンタクラブを設立、２代目会長を務め 2006 年～ 2008 年国際ゾンタ 26 地区エリアⅠ(ﾜﾝ)エリアディレクターとなる。